

余滴より

鍵岡正謹

岡山県博物館協議会が22周年を迎えた。県内の美術館・博物館・郷土資料館など79館が集まる団体で、ひとつの県でこれほど多い文化館が集合体となる例はない。担当館として少しは自慢したい。大原美術館がその先駆となったことは言うまでもない。▼「Ohara Contemporary」展は同時代を伴走する大原美術館の姿勢を鮮明にした。工芸館の中庭にヤノベケンジの6メートルを超える立体《サン・チャイルド》が立っていた。▼チェルノブイリ原発にコンクリート棺が次々に覆う姿を、小説家浅田次郎はまるでマトリョーシカ人形だといった。ヤノベ少年像も美術家があの原発を訪れた際に着想した姿が、いまに巨大化した。なんたる皮肉なユーモアだろう。▼有隣荘では青木野枝が重厚な和洋中の部屋に、鉄彫刻《ふりそそぐもの》を提示し新鮮な日常世界を顕現させた。▼一階和室では、鉄骨の林が畳から立ち上がり餅が鉄線とめられている。光ふる軽やかな鉄林のむこう、床間の掛軸は謝寅の落款がみえる蕪村筆田家飼馬図、大原家では鴉と呼び習わしている。蕪村と野枝の超時空間的な付合いに、「延宝之句法 餅旧苔の醜を削れば風新柳のけづりかけ」「酒十駄ゆりもて行や夏こだち」の蕪村句が浮かんだ。▼二階和室には石鯨が重ね置かれる鉄小箱の作品が畳に正坐し、床間の掛軸は呉昌碩筆芙蓉図の取合わせ。「徳は孤ならず、必ず隣あり」と鄙郁たる香が聞こえた。



岡山県立美術館
OKAYAMA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
http://www.pref.okayama.jp/seikatsu/kenbi/

交通案内 JR岡山駅東口から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩3分
・宇野バス 四御神行または瀬戸駅行「表町入り口」下車徒歩3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00 (入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)／年末年始／展示替え期間中

編集後記

大山真季

美術館ニュース101号をお届けします。新年度を迎え、美術館でも新しいことがいくつか始まりました。シンボルマークとロゴタイプが誕生したことで、美術館ニュースもこの101号からリニューアルとなりました。また、収蔵品展示では今まで洋画、工芸、日本画と展示室の空間を3つに分けていたところを、一部テーマを設けて、全分野同じ空間に展示する取り組みも始めました。25周年を迎えたこの年、新たな一歩を踏み出した当館ですが、今後もこの美術館ニュースを通じて様々な情報をお届けできるよう努めて参りたいと思います。

「美術館の紹介」vol.1

岡山県立美術館の外壁は石、タイル、金属の三種の素材で構成されている。有田焼でつくられた緑色のタイルは細くて硬い「竹」をイメージしている。一度触れて、質感を確かめてみてはどうだろうか。

「老子図」のこと

守安 收

この度、当館の牧谿筆《老子図(通称:鼻毛老子)》が重要文化財に指定されました。購入にかかわった一人としてとても嬉しい気分です。わが国で唐絵の最高作家と評価されてきた牧谿や道教の祖である老子のことは、他でも情報を得ることができるでしょうから、ちょっとここだけの話を記します。

開館の翌年、平成元年にこの作品が当館にもたらされたのは、ひとつの偶然と幸運のなせる業でした。あるお茶会が東京近郊で開かれた際、本命の客であった日本美術史の大家が所用で急遽欠席。当日の掛物《老子図》をご覧になっていたら、必ずや氏と関係の深い東京の某美術館に入っていたことでしょう。結局、ご縁がないのだらうということで、次善の候補地岡山に持ち込まれ、即収集となった次第です。中国大陸から請来され、足利義満の所蔵品であった《老子図》は、徳川家康の遺品として紀州徳川家に伝来し、昭和2年(1927)に売り立てられて、11万9千円という高値で落札された経緯があります。その後、第二次大戦中に焼失したとされ、戦後は誰も見たことのない失われた名品となっていました。

当館が入手したという知らせが広まると、私どもの《老子図》は江戸狩野が写した模本(ある高名な研究者は、牧谿の実物は見ていないが、この模本の方が良い出来であろうと美術雑誌に発表していました。)ではないのか?などといった、随分いろいろなお話が飛び込んできました。極めつけは、当館を訪れた某大先生が私に向かって放った「これは田舎が持つものではない。」というお言葉でした。確かにその通りだと思います。水墨人物画史上、世界屈指の作品が、ここ岡山に在るのですから。心の中で快哉を叫んだ瞬間でした。

《老子図》は、永年秘蔵されて折れが生じ、表装裂にも傷みがあったため、修復を行いました。京表具師の墨申堂と相談して、表装(仏様二段表装)は元裂(中廻・風袋:丹地古牡丹唐草文金襴。総地:中納戸地古牡丹唐草文金襴)を使い、一部欠損部には、天地をごく僅か縮めてその余り裂で補いました。徳川美術館に貸し出した時には、表具の出来映えを含めて故徳川義宣館長からお褒めの言葉を頂戴しました。

《老子図》は、私をシカゴ美術館の『道教展』に連れて行ってくれました。その空前絶後の展覧会の入り口に彼は鎮座し、以後、道教や老子に関する刊行物には必ずといってよいほど、その画像が使われるようになりました。てっぺんが凹んだ禿頭の周囲にわずかに残る髪を振り乱し、おまけに鼻毛は伸び放題。目も耳も鼻も口も容貌は怪異で、あまりなりたくないお姿ではありますが、私にとっては心を許した良き友です。

2013年4月16日から5月6日に東京国立博物館で開催された「平成25年 新指定国宝・重要文化財」の展示に《老子図》も出品され、重文指定が決まってから初のお披露目となりました。当館では2013年8月6日から25日の間、「岡山の美術展」内で展示します。



牧谿《紙本墨画 老子像》
13世紀 平成25年新指定重要文化財

開館25周年記念事業レポート

大山真季

当館は今年の3月18日で開館25周年を迎えました。それを記念して、無料開放デーイベントや、昨年度末に誕生した美術館のシンボルマークとロゴタイプの紹介展示を行い、普段の特別展や常設展とは少し違った展示を多くの来館者の方々に楽しんでいただきました。

美術館シンボルマークとロゴタイプのパネル展示 3月19日|火|—4月7日|日|

岡山出身で日本を代表するグラフィックデザイナー、原研哉氏による当館のシンボルマークとロゴタイプが今年の3月に誕生しました。今回の展示では、シンボルマークとロゴタイプの紹介の他、原氏のデザイン意図や今後の使用イメージをパネルで展示し、来館者の方々へお披露目となりました。

岡山の「岡」と建築家岡田新一設計による美術館の重厚な四角い建物をイメージしてつくられたマークとロゴタイプは、リニューアルした美術館の案内リーフレットや展覧会のチラシなどに使用され、当館の象徴として全国に広がっています。



無料開放デー 4月5日|金|—7日|日|

4月5日から7日の3日間、無料開放デーを行いました。その期間中、屋内スペースにて「美術館シンボルマークとロゴタイプのパネル展示」、二階展示室にて岡山の美術展「おかやまアートコレクション探訪Ⅴ 野崎家コレクションⅡ—個性集う地方サロン—」、そして地下展示室では特別展示「映像その記録・表現・記憶」の3つの展示を開催し、来館者の方々に無料でご観覧いただきました。連日、岡山の美術展会場ではギャラリートークが、屋内広場では特別展示の出品作家による対談シンポジウムが行われました。作品解説や展示の裏話、それぞれの作家視点による今回の展示に関する意見交換などが活発に行われ、参加した方々はメモをとるなど、熱心に聞き入る様子が見受けられました。

2回目となる「野崎家コレクション」展では書画や茶道具といった趣味の逸品を中心に展示し、野崎家当主の幅広い交友と文芸への理解を示す内容を紹介。当時の暮らしぶりに思いを馳せ、憧れを抱きながら鑑賞した人も多かったのではないのでしょうか。

特別展示「映像その記録・表現・記憶」では写真家、映像作家、音楽・美術評論家など多くの肩書きを持つ能勢伊勢雄氏による企画協力の下、映像作品を中心とした展示を行いました。仮設壁のない、広々と打ち抜かれた展示室を利用し、壁に大きく映し出された映像、そして入り口正面にデコレーションされたテキスタイル作品は来場者を圧倒します。会場奥の空間には、銀写真家集団Phenomenaと映像作家小山英治氏による写真作品とアニメーションのコラボレーション展示を行いました。中でも1万枚のドローイングによるアニメーション《ブラックボードの解剖学》は眼科医を営む小山氏らしい作品であり、人体構造を描いたドローイングが目まぐるしく変化することで生命の誕生を表現しています。「映像は暗闇を求め写真は光を求めると」対談シンポジウムで小山氏が語ったように二つの反するものによるコラボレーション展示となりました。



ギャラリートーク風景



小山英治《ブラックボードの解剖学》とPhenomena写真作品

岡山の練り供養

特別展「極楽へのいざない—練り供養をめぐる美術—」ただいま準備中

中田利枝子

「練り供養」とは、阿弥陀如来が西方極楽浄土から多くの聖衆とともに現世までお迎えに来てくれる様子を再現する、演劇的仏教行事です。平安時代中期に『往生要集』を著した恵心僧都源信が創案したとされます。初めは僧や信者グループにより信仰を高める法会として行われ、「^{ごしようえ}迎接会」とか「^{むかえこう}迎講」とよばれました。やがて鎌倉時代になると布教や勧進のためにより演出に工夫がされて「^{らいごうえ}来迎会」とも呼ばれました。江戸時代以降は寺院のイベントとして、多くの参詣人や見物客を集め娯楽性を高めます。この段階で、出演者が観客の前を練り歩くさまから「練り供養」という名称が一般的になったと見られています。練り供養はかつて盛んに行われていましたが、現在も定期的に行われているのは全国で20カ所余りにすぎません。そのうち2例が岡山県の久米南町誕生寺と瀬戸内市弘法寺です。

誕生寺は、浄土宗の開祖法然上人の誕生地に鎌倉時代に創建されました。ここの行事は、法然上人の両親の追善供養をするものです。山門を出て300メートルほどの所にある娑婆堂(地藏堂)を現世に見立て、本堂を出発した一行があらかじめ娑婆堂に配置された父上の像(翌年は母上の像、というように毎年輪番となっている)を迎えに来て、輿にお乗せして、再び本堂へと帰っていくという次第です。その起源や当初のやり方ははっきりしませんが、元禄12年(1699)には再開され今日に至っています。

弘法寺は、鎌倉時代以降の古文書も伝わる古刹です。昭和42年(1967)に山上の本堂ほかを焼失してから一時行事が中断されましたが、平成9年(1997)に再開しました。弘法寺の練り供養は、六観音を始めたという一行が中将姫像(かつては「行者像」と記されています)をお迎えに来て、阿弥陀如来にお渡しするという次第です。ここの最大の特徴は、人が中に入る半身の阿弥陀如来像が今日も現役で出演している点です。このような像の使用は鎌倉時代にまでさかのぼり、実に古い形態を保っていると考えられるのです。

音曲や所作を伴う芸能事は、いったん中断しその期間が長くなると再現は難しくなります。今日まで連続と継続してきた背景には多くの苦労があったことと敬意を払わずにはいられません。当館では特別展「極楽へのいざない—練り供養をめぐる美術—」(11月1日より)開催に向け、この行事の映像記録作成にも取り組んでいます。



弘法寺の練り供養



誕生寺の練り供養



《版画 千手山弘法寺脚供養之図式》



国宝《地獄草紙》東京国立博物館
Image:TNM Image Archives



《菩薩面》吉備津神社

紐育／倫敦1998—2013

高嶋雄一郎



大英博物館より、トラファルガー広場を眺める

不意に、昨秋に急逝した美術関係者が、当時東京のとある美術館でボランティアをしていた大学生の私へ話した言葉を思い出した——「初めて訪れた海外がニューヨークとロンドンでは、まるで違う人間になる」。この話の発端は定かでないが、いま思えば、その頃に初渡米をし興奮冷めやらぬ私に対して、若かりし頃に同地へ無一文で渡ったと話してくれた彼なりに、何かしらの共感や優しさがあったのかもしれない。

この言葉に妙な形で囚われていたのか、あれから米国に渡る機会は何度かあれど、英国を訪れる縁は一度もなかった。しかしあれから15年が過ぎた今年2月、あまりに呆気なくその機会を得る。それは、年明けに東京で立ち上がり再来年に岡山へも巡回する英国現代美術展(仮)のための調査だった。同展はブリティッシュ・カウンシルの協力を得て企画され、その収蔵品から最新の英国美術を紹介する貴重な機会となる。現地ではハイワード・ギャラリーやテート・モダンの関係者からのヒアリングに始まり、ベッカムやエンジェルなど治安が不安視される地区に設けられた美術施設への取材や、近年目覚ましい活躍をしている作家のアトリエ訪問など、多くの知見を得られた。

こうして間断なく続く旅程をこなすため地下鉄や二階建てバスに揺られる傍らで、思った以上にその様々な文化に惹かれていたことにあらためて気付かされた。美術館に鎮座する英国美術は勿論のこと、週末のサッカーの試合を告げる大衆紙、街中に流れる大衆音楽、古道具で覆い尽された蚤の市、そして多彩なファッションが溢れる市街地。「美術と音楽とサッカーが好きであの国が好きじゃないなんてありえない」と私に告

げた出発前のとある知人の言は、紛れもないものだったのだ。

となると、前述の彼の言葉はどういうことなのか。いま考えるに、どこに最初に渡るかでその「眼」が定まる、ということなのかもしれない。確かに初渡米の際にはその全てが鮮烈に映り、産まれて初めて目にした相手を親と信じる雑さながら、多くの大衆音楽をヴェルヴェット・アンダーグラウンドと比して聴いていたし、美術界の中心にはウォーホルが常にいるように妄信していた。この物差しに適わなければ端から見向きもしない、そんな歳月があった気すらする。

その青臭い価値観もいつの間にか角が取れたのか、今では行く先々どこもが魅力的に思えてしまうほどだ。だが、今回の滞在でも私はロンドンを観ておらず、米国や日本を通した「倫敦」を観ていたのかもしれない。若かりし頃に得た視座には抗えない——彼はそう私に忠告したかったのだ、そう思い始めている。

帰国後まず心に浮かんだのは、優れた作家や美術館そして関係者がかの地には溢れていたが、私の知る日本の作家や同業者にも、それらに比肩する人々は間違いなく居るし、むしろ印刷物などに顕著な細部への感覚において日本は突出している、との自負だった。だが全ては、歴史自体が、どこで、誰の思惑を核にするかの違いに過ぎない。我々は、自らの歴史を見つめ、紡ぐ必要がある。そのために、現在の日本において、我々が如何に海外の美術を参照し、建設的かつ自覚的に理解するか。本展もその足掛かりとすべく、今回見聞きしたあらゆることの意味を、自分なりの眼でいまいちど反芻したい、そう思っている。

新収蔵品紹介

File 01

平田郷陽作品を中心に
福富幸



平田郷陽 《仕度》 昭和17年(1942)

昨年度当館は、平田郷陽作《仕度》《河畔落日》など4件5点、佐藤常子作「絨織着物《雪中花》」など10点、清水比庵原画矢部犀洲作《窓日彫卓》ほか2点、の工芸作品の寄贈を受けました。

なんとと言っても特筆すべきは、当館初のコレクションとなる平田郷陽作品です。衣裳人形で国指定重要無形文化財保持者の認定を受けた郷陽は、1903年東京浅草の生まれですが、父初代郷陽は総社の出身で東京へ出て活躍した生き人形師でした。郷陽も小学校卒業後、父について人形づくりを始めました。関東大震災で家を失い岡山へ疎開、父の病死にともない二代郷陽を襲名し1926年まで岡山に居を構えました。その後も折に触れ、岡山を訪れたことがわかっています。寄贈された作品は戦前に岡山で直接、郷陽と親交のあった方の旧蔵品で、郷陽の岡山での足跡を語る上で欠かせない作品です。郷陽

研究者も所在を探しあぐねていた戦前の代表作でもあり、寄贈のお話をうかがったときは驚きと喜びでいっぱいでした。戦災にも遭わず今日まで大切に保管されてきた作品を次代に引き継いでいくよう当館に託されました。

昨秋、日本伝統工芸展岡山展の関連事業として紹介した岡山市在住の染織家佐藤常子氏は、四季折々の豊かな情感を縞文様に託して表現されています。一見単純に見える縞も一点一点配色や縞幅を工夫し独創的な作品に仕上げられています。展覧会を記念して主要作品10点を寄贈いただきました。また清水比庵の絵画作品とともに寄贈された木工芸作品は、比庵の広い交友関係と多彩な創作を紹介するに際し、有益な作品であると考えます。これらの作品は、今後「岡山の美術展」などで公開活用していきます。



平田郷陽 《河畔落日》
昭和16年(1941)

展覧会スケジュール

7月
July

6月7日|金|—7月15日|月・祝|

【岡山の美術展】
漆芸家難波仁斎 生誕110年記念回顧展

7月19日|金|—8月25日|日|

【特別展】
永青文庫 細川家の名宝展

永青文庫は、700年の歴史を持つ細川家の文化財を後世に伝えるために、昭和25年に設立されました。肥後熊本藩の基礎を築いた初代幽斎とその子忠興、宮本武蔵を客分として招いた3代忠利、動植物写生帖を多く残した8代重賢など歴代藩主の歴史と文化を伝えています。また近代の優れた日利き16代護立が集めた刀剣、中国美術、禅画や近代絵画など多彩な内容を誇ります。本展では、永青文庫所蔵品の中から選りすぐりの名品約140点を紹介します。

7月21日|日|、28日|日|、
8月4日|日|、11日|日|
各回 14:00～
永青文庫 細川家の名宝展
ギャラリートーク
講師 当館学芸員
会場 2階展示室 ※要観覧券

8月
August

7月26日|金| 18:00～19:00

美術の夕べ 「永青文庫の名宝をみる」
講師 中村麻里子(主任学芸員)
会場 2階展示室 ※要観覧券

8月3日|土| 14:00～15:30

記念講演会 「戦国を生き抜いた知恵」
講師 細川護熙氏(細川家第18代当主・永青文庫理事長)
会場 2階ホール(定員210名 応募多数の場合は抽選)
※事前申し込みが必要。詳細は展覧会公式HPをご覧ください。
公式HP <http://www.sanyo.oni.co.jp/info/eisei-meicho/>

8月10日|土| 14:00～15:30

美術館講座 「永青文庫の近世・近代絵画」
講師 中村麻里子(主任学芸員)
会場 地下講義室(先着70名)

8月23日|金| 18:00～19:00

美術の夕べ 「永青文庫の名宝をみる」
講師 中田利枝子(学芸課長)
会場 2階展示室 ※要観覧券

9月
September

8月30日|金|—10月20日|日|

【岡山の美術展】
徳永仁臣(柳洲)展

9月4日|水|—9月15日|日|

第64回岡山県美術展覧会

9月27日|金|—11月4日|月・祝|

【特別展】
中原浩大展 自己模倣

KODAI NAKAHARA: Migration or Retrospective
本展は、1980年代から現在に至るまでその独創的な作品と活動で多大な影響を与え続けている美術家・中原浩大の初の回顧展になります。久しく展示されてこなかった初期の代表作はもちろんのこと、失われた作品の作家自身による再制作、当時実現出来なかった計画の再現、また近年新たに試みている作品の展示などによって、本展は、この作家の比類ない足跡、その過去と現在を巡るまたとない機会となるでしょう。(瀬戸内国際芸術祭広域連携事業)